

アメリカにおける多文化的歴史教育の理論的・実践的研究  
-「多様性」と「公共性」を視点として-

Multicultural History Education in United States : Through “diversity” and “publicness”

プロジェクト代表者：桐谷 正信（教育学部・准教授）

MASANOBU KIRITANI (Faculty of Education Associate Professor)

## 1. はじめに

本研究は、国内の多文化化・価値の多様化の進展に伴う教育の課題に応えるために、多文化主義（Multiculturalism）を前提とする歴史教育のあり方を考える基礎的研究である。国内の多文化化の進展に伴い、当然教育のあらゆる側面において文化や価値の「多様性」を尊重することが要求されることとなる。特に文化的マイノリティ集団の文化・価値を教育内容に適切に位置づけ、教育内容全体を組み替えることが必要となる。多文化教育のあり方について考究する際には、現代的課題と捉えられがちであるが、多文化的状況の歴史的形成過程こそが中心的課題となる。それゆえ、多文化教育の先進国であるアメリカとカナダにおける多文化的歴史教育論と「多様性」・「公共性」の両者に尊重した教育実践（カリキュラムや教科書等の教材を含む）の比較検討を通して、日本における多文化共生社会の教育のあり方について考察を行った。具体的には、アメリカ合衆国の歴史教育において研究・実践が進められている「多文化的歴史教育（Multicultural History Education）」を思考モデルとし、多様な民族・文化に公正に配慮した歴史教育の内容構成の理論的枠組みを考える視点を提出することを目的とした。

## 2. 研究の成果

本年度は、資料の収集・分析及び検討を行った。具体的には、本年度の研究として、主に以下の三点について研究活動を行った。

- (1) アメリカ・カナダで開発・実践されている「多文化的歴史教育」カリキュラムの収集・分析を行った。具体的には、今年度はアメリカ・マサチューセッツ州、カナダ・アルバータ州教育局に赴き、社会科教育担当者及びカリキュラム開発担当者への意見聴取を行った。
- (2) アメリカ・マサチューセッツ州、カナダ・アルバータ州の歴史カリキュラムを収集し、分析した。

多文化的歴史教育のアプローチは、以下の三つに大別できる。

- ・ 伝統文化アプローチ： 地域・州・合衆国におけるマイノリティの文化的伝統に関する学習
- ・ 貢献アプローチ： 地域・州・合衆国の発展・開発におけるマイノリティの貢献とマジョリティとの相互作用に関する歴史的学習
- ・ 抑圧アプローチ： マジョリティの間の相互作用と葛藤・紛争によるマイノリティに対する抑圧の歴史的学習

「伝統文化アプローチ」は、主に多文化教育の導入として採られるアプローチであり、「貢献」や「抑圧」といった政治的文脈には乗せずに、伝統的な文化や生活様式のそのものがある一定の価値あるものとして学習する。「貢献アプローチ」は、多文化社会の正（プラス）の側面を積極的に打ち出し、多文化社会においてマイノリティを高く位置づけるアプローチ

である。「抑圧アプローチ」は、マジョリティや他の集団との相互作用や影響の意義や成果を評価しつつも、多文化社会の正と負（マイナス）の両側面から学習するアプローチである。マサチューセッツ州合衆国史スタンダードが採用しているアプローチは、「貢献アプローチ」である。この「貢献アプローチ」は、東海岸のニューヨーク州でも採られているアプローチである。これは、ヨーロッパの植民によるアメリカ合衆国の建国の端緒となった地域にみられる歴史の「物語り方」である。それに比して、西海岸の諸州では、「貢献アプローチ」ではなく、「伝統文化アプローチ」と「貢献アプローチ」を基礎として「抑圧アプローチ」を中心に州史・合衆国史が構成されている。アメリカ合衆国の建設は、アメリカ先住民の土地を武力と法（例えばドーズ法や合衆国政府と各部族との間に締結された協定など）によって奪うことによって成立したものであり、現在、広大なアメリカ先住民の居留区を内包し、多くの先住民が生活している西部諸州においては、1934年のインディアン再組織法によってその自治権と居留区を保っているものの、その歴史的事実から目を背ける事はできない。ナショナル・スタンダードの策定による教育内容の中央集権化が進行する状況で、当該州の抱える多様性の基盤の相違に基づく多文化的歴史教育スタンダード・カリキュラムの開発も重要な課題である。

(3) 全米社会科評議会（NCSS）の第86回研究大会に参加し、多文化歴史教育の動向について収集・分析した。

NCSSにおいて顕著に見られたアメリカ歴史学習の特色は以下の二つである。

①タイムライン(Timeline)による歴史理解

時間軸の変化をタイムラインに沿った理解を工夫している。しかしながら、日本の歴史年表のような単系的なタイムラインではなく、立体的な歴史理解を目指している。その事例として、「牛乳パックのタイムライン」が提案されている。紙製の牛乳パックを開き、各面に時間・場所・人などの一つの歴史事象の諸要素を書き込み、作成したタイムラインを繋げることによって、時間感覚を立体的・視覚的に捉えることができ、多面的に理解できる。

*Timelines : Potential, Possibilities and Problems, Primary Presenter Ann Claunch*

②問題中心(Issues Centered)の歴史学習

世界的な潮流としてシティズンシップの育成が重視されている。アメリカでは伝統的に社会科がシティズンシップの育成を中心的に担って来た。これは歴史教育においても目指されている。シティズンシップの育成＝公民教育としての歴史学習が強調されている。移民問題などの現代的課題の社会史的に追求する単元の開発などが多く見られた。

*Issues Centered Education : Making History Useful for Civic Education, Primary Presenter G Dale Greenawald*

*Opening Doors : Understanding Immigration in United States History, Presenter Chris Mullin*